

シリア・パレスチナ難民への 越冬支援と 出会った家族

中東というと暑い砂漠というイメージがありますが、レバノンやパレスチナには四季があり、冬はかなり気温が下がり冷たい雨が降り続きます。特にレバノンの山間部は降雪し、氷点下以下の日も続きます。この地域はシリア国境に近く、シリアからの難民が点在しています。越冬支援として、当会はベカーと呼ばれる地域で、ワーベル難民キャンプと、その周辺部に点在して住んでいるシリアから逃げてきたパレスチナ難民家族を対象に燃料支援をガソリンスタンドや給油車で実施しています。灯油のポリタンクが高いため、買えずにペットボトルを持ってくる人たちがたくさんいます。そのペットボトルでさえもただではありません。



むこうに雪山の見えるところで給油



ガソリンスタンドでも配布

越冬支援で出会った家族

ファティマさんは28歳。両親や兄弟は3年前にシリアでどこかに連れ去られたままで、夫と一緒にシリアのセットザイナブ難民キャンプから避難してきました。以前はバラックに住んでいましたが、国連の家賃補助が5月に打ち切りになって家賃が払えなくなり、今のテントに移ってきました。テントの家賃（50ドル）は無料にしてもらっているそうです。しかしへき地に住んでいるため、夫はシリア人で無職にも関わらず UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の支援は届かず、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）からの現金支給月100ドル程が生活の糧です。4か月前に生まれたばかりの赤ちゃんが6歳、7歳、8歳のあわせて4人の子どもがいます。電気がない暗いテントの中でお母さんを取り巻くようにして座る子どもたち。赤ちゃんのワクチン接種にはUNRWAのクリニックに片道45分かけて歩いて行ったそうです。子どもたちは片道30分かけてバスに乗りUNRWAの学校に通っています。テント生活を始めて9か月。地面に直に棚を置いただけの簡易の台所、外のトイレと水場。外からは常に風が吹きこむという環境であるにも



住宅手当がなくなった家族

テントの外観



関わらず、ファティマさんは泣き言を一切言わず、淡々と状況を受容しているようにすら見えました。

71歳のホルシュさんは小屋の中で暮らしています。中には洗濯機とストーブがあるだけ。戸棚もないため、飲み水や食べ物は全部床に置いて並べています。トイ



言葉を失った女の子と祖父

レは隣の家に借りに行きます。赤いコートを着た女の子が寄ってきました。「孫じゃよ。今年で5歳になる。イナーシュというが、母親が一年前にいなくなりました。」イナーシュちゃんに話しかけてみましたが、ただ大きな目をくるくる動かすだけです。給油車がくると興味深そうに近づいてきました。父親によると、お母さんが失踪して以来何もしゃべらなくなったそうです。イナーシュは明らかに心に傷を負っており、専門家に見てもらう必要があります。しかしここは僻地で、大通りまで徒歩で20分ほど歩かなければなりません。そこから近くの町まではさらに車で30分以上かかります。またこの地域にはシリアから来たパレスチナ人が無料でカウンセリングを受けられるような施設はありません。隣接する家畜小屋の強烈な臭いが小屋には漂っていました。近くにはお店も幼稚園もありません。適切なカウンセリングを受けられないまま歳月が流れていきます。収入のない父親と失踪した母親。持病を抱える祖父の隣をぐるぐると周りながら過ごす日々。これがイナーシュの暮らしです。

乳幼児とお母さんへの支援

シャティーラとブルジバラジネキャンプでは、産婦人科医や心理専門家などによる育児指導ワークショップを連続して開催しています。国連によると、シリア難民の妊婦や母親のうち12%が20歳以下で、十分な知識や経験がないまま、妊娠・出産・子育てに直面する間に、うつ症状などを抱えるケースも報告されています。とりわけ避難先では孤立し、育児を助けたりや相談相手になる本人の親はまだシリアにいるといったケースも多く、必要なサポートが得られないまま大きなストレスを抱え込んでいるからです。シリアで夫が行方不明になり、夫の家族と軋轢を抱えて同居しているケースも報告されているため、妊娠・出産に伴う鬱症

状と対策をテーマにワークショップを行いました。講師の臨床心理士によると、妊娠や出産後約14%にパニック症、強迫神経症、全般性不安障害等が見られ、気分が頻繁に変化する、無気力になる、食欲が過剰・低下する、睡眠障害になる、集中力が欠如する、罪悪感が増して自尊心が低下する、自殺願望が芽生える等の状態になることが多いそうです。その後で個別のカウンセリングの時間を設けました。母親の一人はうつ症状を訴え自らカウンセリングを求めたため、UNRWAの臨床心理士に紹介しました。別の10代の母親は夫がヨーロッパに脱出後、離婚を言い渡されたが、幼い子どもを抱えており、つらい気持ちを自分の家族にもうまく相談できないでいると訴えていました。これらの母親に対してはアドバイスを与えると共に、国連などに紹介をして適切な支援を受けるようにしました。

UNRWAによると、シリアから避難したパレスチナ人の妊婦・母親のうち、38%が十分な飲料水へのアクセスがなく、23%が洗濯や手洗いの水不足を訴えており、10%がトイレを15人以上で共有して使用している状況です。ワークショップの後、紙おむつとおしりふき、子ども用の温度計、かぶれ防止のクリーム、前かけ等を配布し、120人が受け取りました。



子育てワークショップに参加する母と子



約1000人の子どもに暖かい衣類や長靴を配布